

+

ろんだん 佐賀



朝長 修さん

ともながクリニック院長

ともなが・おさむ 1960年生まれ。嬉野市(旧嬉野町)出身。鹿島高一長崎大医学部卒。1987年に東京女子医科大糖尿病センターに入局、専門医として特に糖尿病性腎症、腎不全の治療に従事する。2006年、ともながクリニック糖尿病生活習慣病センター(新宿区)を開設。東京女子医科大糖尿病センター非常勤講師。東京都。

私は学生時代、部活、麻雀、趣味に忙殺され、1年間卒業延期、1987(昭和62)年に東京女子医科大学糖尿病センターに入局しました。当時の主任教授は平田幸正先生で、我が国の糖尿病臨床の基礎を築かれた方でした。私の父が九州大学第二内科で平田先生の後輩であったこともあり、誘いを受けての進路でした。血糖だけを専門にして、そんな狭い分野でやっていくのかと不安がありました。消化器、循環器、呼吸器内科がメジャーで、ちよつとマイナーな内分泌、その中の代謝疾患、そのまた下の糖尿病というイメージがあったのです。しかし東京見物をしたという邪悪な動機も後押ししました。

女子医大糖尿病センターは

国民病とも言える糖尿病

自身の生活習慣見直して

圧倒的な規模で驚きました。5階建てのビルに外来と60床の病棟があり、眼科が併設され、透析施設も有しています。年間の初診患者は3千人以上、入院患者さんは腎不全、脳卒中、心機能低下や感染症、壊疽など重症者も目立ちました。血糖だけを診る、ひ弱な

ことになり、まさに国民病と云ってもよいほどの様相です。そのような診断基準に疑問を抱くこともあります。糖尿病の合併症で不便を強いられる患者さんは増加し、社会的な問題にもなっています。

出現し、結核専門医の需要は激減、やむを得ず糖尿病の専門家を志されたそうです。医学の進歩は目を見張るものがあり、将来、どのような分野のニーズが高まるかは分からないものです。

糖尿病も新薬が競って開発され、治療内容は向上しました。自分率先して取り組まずに、患者さんには指導

医者になるのではないかとの不安は払拭されました。その後も糖尿病患者さんは増加し、2016(平成28)年国民健康・栄養調査によると「糖尿病が強く疑われる人」および「糖尿病の可能性が否定できない人」は2千万人に達しています。70歳以上人口のほぼ20%が糖尿病だとい

れほど大きな分野になるとは思いもせませんでした。今では、どの診療科も糖尿病の知識が要求されます。我が国の先陣を切つて糖尿病センターを立ち上げられた平田先生に

た。ただ、患者さんの数が減るかどうかは不明です。長年、現場において痛感するのは、糖尿病の発症予防、糖尿病にならないことの重要性です。そのために健康的な生活習慣を心がけなければなりません。禁煙、適正体重の維持、バランス良い食生活、運動の

習慣です。より早期の対策とを勧めます。歴を振り返ってみられることをお勧めします。

できません。自らプレッシャーをかけて、クリニックのスタッフと

+